

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520141

研究課題名(和文) 山田流箏曲の古曲についての研究

研究課題名(英文) Study on Kokyoku of the Yamada School

研究代表者

萩岡 松韻 (HAGIOKA, SHOIN)

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：30376925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、山田流箏曲の古典作品のうち古曲に分類され稀曲・秘曲とされる楽曲のアーカイブ(録音・楽譜化)を目的とした。楽譜化では5曲の古曲について行った。また録音のデジタルアーカイブ化では、SPレコード等の歴史的音源の収集および古曲に関連した楽曲の収集、廃盤となって再販されていない歴史的音源について多くをデジタル化した。成果発表として「萩岡松韻りさいたる」での古曲《めぐり逢せ》の研究演奏を行い、山田流箏曲伝承曲の目録作成、古曲についての山田流箏曲各芸系における比較を通して山田流箏曲各芸系の音楽的な特徴をまとめ配布した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to archive and make musical scores of some Kokyoku (literally "old piece") of the Yamada School of Koto music. A Kokyoku is classified as a Kikyoku (literally "rare piece") or a Hikyoku (literally "secret piece"). In this study musical scores of five Kokyoku have been made. Many historical recordings of Kokyoku have been collected and digitalized. The pieces, which have been passed down among the Yamada School, are cataloged. As a research presentation "Meguriouse", one of the Kokyoku, has performed on a recital by Hagioka Shoin and a booklet in which characteristics about the Kokyoku depend on each lineage of the Yamada School have summarized has distributed at the recital.

研究分野：山田流箏曲

キーワード：山田流箏曲 古曲 アーカイブ 山田検校

1. 研究開始当初の背景

山田流箏曲は、生田流の名人長谷富検校の高弟であった山田松黒の門人、山田検校が新たに江戸を中心として創始した箏曲である。山田検校は、生田流箏曲の基本としての「組歌」をそのまま山田風に演奏し、さらに山田流独特の手法と歌のしらべを工夫し、組歌「初音曲」を作曲し、更に「作歌物」とよばれる「江ノ島曲」に代表される曲を作曲している。その特徴は、江戸浄瑠璃、特に河東節や上方生まれの中節など、現在「古曲」とされている浄瑠璃、さらに謡曲などからの曲節や歌詞を借り、伝統的な箏曲の手法の上に新曲の創作をこころみたまものである。山田流箏曲についての学術的な研究は、歌詞解説、楽曲解説、作曲者に関する人物研究、箏曲史概論等これまでに多くの研究者によって研究が行われているが、「古曲」と言われる分野の研究は希有である。また、楽曲についてもSPレコードの時代から、初世萩岡松韻、今井慶松、中能島欣一等の時代を代表する実演家によって音源化がなされているが、これも「古曲」については、現在その入手が困難な状態である。

<古曲について>

山田検校は、江戸時代に出版された歌本『吾孀箏譜』・『増訂撫箏雅譜集』および大正15年刊の『八葉集』によるとその作品は36曲とされており、学習階梯によって「初学曲」、「中歌曲」、「奥歌曲」、「奥組」、「古曲」と分けられている。これらの曲のうち、「初学曲」については明治21年文部省音楽取調掛撰の『箏曲集』に五線譜化され収められているほか、「中歌曲」、「奥歌曲」、「奥組」の曲については、これまで山田流各派によって楽譜化がされている。しかし本研究の調査の対象である「古曲」については、明治・大正期にあまり教習に用いられなかったためか、中には曲の伝承が絶え

てしまった物も存在する。

研究代表者・萩岡松韻は、山田流箏曲萩岡派4代目宗家であり、これまでにリサイタルをはじめとした演奏活動をおこなう傍ら、萩岡家に伝わる山田流箏曲の稀曲・秘曲の研究をおこなっており、自らも楽譜をはじめとした多くの貴重な資料を収集している。その研究成果の一部として、山田流箏曲萩岡派箏曲・三弦模範楽譜(1975~)、山田流箏曲唄本「撫箏唱歌集成」(1990)を出版し、山田流箏曲「四ツ物」をアーカイブしたCD付楽譜集を平成24年4月に出版した。また、国立劇場主催鑑賞会を始めとして古曲についての復元演奏も試みている。

古曲については自家の伝承だけでなく、山田流箏曲の他派に伝承されている曲や同じ曲であっても、伝承者により唄の節付けや箏ノ三絃の手に異同が存在する。現在、山田流箏曲の実演家の中で、そうした古曲をはじめとする秘曲・稀曲の伝承を受けている実演家の高齢化が進んでおり、近い未来には貴重な曲の伝承が途絶えてしまう可能性も出てきている。

これまで山田流箏曲における古典曲の楽譜は、大正6年に徳華會より初世萩岡松韻が発行した箏三絃対照譜が最も古く、以降今井慶松、中能島欣一、伊藤松超、高尾松蓉、鳥居名美野らによる楽譜が出版されているが、細かな歌の節付けは細かい部分の記譜について省略されている。また、稀曲・秘曲といわれる曲や小品については曲の持つ性格上楽譜化されていないものが多く存在する。研究代表者は、こうした曲の一部を楽譜化し音源化しているが、まだまだ一部であり、中には自身が伝承を受けていない曲も存在する。

2. 研究の目的

本研究は、山田流箏曲の古典作品のうち古曲に分類され稀曲・秘曲とされる楽曲の

アーカイブ(録音・楽譜化)を目的とした。同曲に関する研究者は少なく、かつ伝承している実演家はかなりの高齢であるため、いつ伝承が途絶えるかわからないという危機に直面している現状である。本研究により、山田流箏曲の芸系において各派に伝わる古曲の調査、楽曲分析、楽曲目録の作成、伝承者へのインタビュー、伝承者の演奏の保存(録音・楽譜化)を行うことで無形文化財ともいべき楽曲の保護保存を行い、もって、貴重な古曲の伝承の一助となるべく考えた。

本研究で明らかにしたいことは、以下の5点にまとめられる。

(1) 山田検校以後の芸の流れを伝えている山田流箏曲各芸系の伝承曲の目録作成。

(2) 楽曲の伝承者による演奏の記録。廃盤となっている貴重レコード・音源・楽譜の収集、および、山田流箏曲の古曲の楽譜化と録音等による楽曲のアーカイブ。

(3) 古曲についての山田流箏曲各芸系における比較を通して山田流箏曲各芸系の音楽的な特徴を明らかとする。

(4) 生田流箏曲の芸系に伝わる同名曲の比較を行い、歌の節付・箏・三絃の手付の違いを明らかにする。また歌詞についても異同を明らかとし、山田流箏曲各芸系の音楽的な特徴を明らかとする。

これまで箏曲の楽譜は、その芸系の家元が学習者の学習および暗記の手助けのために出版してきた。また、楽曲を録音した音源等も学習者の模範演奏となるよう、芸系の家元をはじめとして多くの実演家がおこなっている。

しかし、上述のようにそうした楽曲の多くには稀曲・秘曲といわれている曲はほとんど含まれておらず、同時に、そうした曲を伝承している実演家の高齢化により伝承そのものが危ぶまれている。

山田流箏曲の中でも、同名曲であっても芸系により曲や表現に異同があることから、芸系の音楽的な特徴を調査することは、芸系の正統な存続を考えると意義のあることと考えた。

3. 研究の方法

本研究の内容は、(1) 秘曲・稀曲の収集 (2) 楽曲の記録 (3) 楽曲分析 (4) 稀曲・秘曲として伝わる山田流箏曲の古典作品の弦名譜および五線譜での楽譜化を行い、伝承が途絶えている曲についての復元を行うことの4つに分けられる。

研究の方法として、伝承者へのフィールドワークによる調査(インタビュー・聞き取り調査・レッスン)、関連資料・文献の収集、楽曲分析、楽譜化、保存音源の製作で展開された。

4. 研究成果

(1) 山田検校以後の芸の流れを伝えている山田流箏曲各芸系の伝承曲の目録作成

実演家を対象とした伝承に関するアンケート調査のために、山田流箏曲の曲目一覧を作成した。一覧の作成にあたっては、江戸時代から現代までに出版された歌本・譜本を網羅的に集め、その記載状況を確認した。その結果、従来に作曲年代が明らかになっていない作品についても、おおよその作曲年代を推測することが可能になった。曲目一覧の一部は、「萩岡松韻りさいたる」の配布パンフレットに掲載した。

(2) 楽曲の伝承者による演奏の記録。廃盤となっている貴重レコード・音源・楽譜の収集

録音のデジタルアーカイブ化では、研究代表者宅に伝わるテスト盤 SP に収められた初代萩岡松韻の演奏をはじめとして廃盤となってデジタル化されていない SP、LP など多くの音源をデジタルアーカイブ化した。古

曲の楽譜化として5曲の古曲（《芙蓉峰》《夏やせ》《新七草》《花妻》《明鳥》）について楽譜化を行った。

（3）古曲についての山田流箏曲各芸系における比較を通して山田流箏曲各芸系の音楽的な特徴

いわゆる古典曲の演奏においては、生田流では三味線がメインで箏が装飾的あしらいを担うのに対して、山田流箏曲では箏と三味線の立場が逆転している。また、山田流では歌詞内容に物語性が強く、語り物的要素を擁している。

山田流の各芸系においては、さして云々するほどの大きな個別的特徴は認められないものの、歌い分けに於ける区分や速度の運び、拍の寸法、手法等に微細ながらも特徴がある。

また、本研究の主眼たる「古曲の伝承」に対する取り組み方には相違が認められる。

特に力を入れている芸系の一つに、山登派の鳥居家がある。特に明治22年に三代山登松齡が没し、その名跡が空白になった折、この鳥居家はその伝承を支え、流祖や初代山登検校の作品が今に残る偉業を成し遂げたといえる。さらには当代家元の鳥居名美野は、殆ど演奏の機会を失って伝承が希薄になっている箏組歌の伝承に力を入れ、流派・芸系を越えて、その伝承に尽力している。については、伝承と古譜との比較研究にも努めている点は大いに買えるが、その結果、従来伝承のフシや歌詞を古譜のように改めている点に、些か問題がある。今後の古曲伝承に対する大きな課題と言えよう。

山勢派の高橋家、萩岡家も古曲の伝承に尽力してきた。中でも、萩岡家には数々の古い音源や、稀曲の楽譜が残されており、本研究では、未整理のそれらを少しずつ発掘して整理し、再検討した結果、各芸系の古老たちの記憶の中に臆気に残っていた稀曲の一部が蘇ったことは快挙と言えよう。

今後、さらなる発掘と検証の続行を行っていく予定である。

（4）生田流箏曲の芸系に伝わる同名曲との比較

山田流の流祖・山田検校は創流以前に、いわゆる生田流の諸作品を習得していた。従って、山田検校が新たに作曲した作品の中にも、「地歌」の手が、随所に、さりげなく用いられている。また、楽曲の伝承については、自作のみならず、生田流で通用の地歌を撰取しているし、それらは、免許制度の中に、「中手事物」として《八千代獅子》《難波獅子》《万歳獅子》《夕空》《椿尽》《松尽》《越後獅子》《玉川》、「奥手事物」として《さらし》《吼囃》《松蔭の月》《名所土産》《根曳の松》《西行桜》《雪》《花の旅》《縁の綱》《東獅子》《若菜》《虫の音》《末の契》《嵯峨の春》《宇治巡り》《四季の眺》《若菜》《松竹梅》《鐘が岬》《夕顔》《楳枕》《御山獅子》《里の暁》《茶の湯音頭》《磯千鳥》《笹の露》、吉沢検校の古今組全曲、《秋風曲》《五段砧》《七小町》《萩の露》《新高砂》《嵯峨の秋》《雪中の竹》《御国の誉》等がしっかりと組み込まれている。中には生田流では特定の芸系の人しか弾かなくなった極めて珍しい《松蔭の月》や《嵯峨の春》《縁の綱》が、一般的に残っている。

但し、山田流では、あくまでも箏が中心で、三味線は副次的立場であることは、前述の通りである。生田流においては、地歌三味線単独の弾き歌いがよく行われ、特に端歌物の場合はその傾向が強い。しかし山田流ではそれは殆どありえない。三味線も長唄に近い細棹で、通常は平駒をかけ、平撥で演奏するが、地歌物に限って、重り入りの地歌駒を用いる場合もある。

合奏に際しては、生田流では三味線が主体で、それに箏、さらにはそれぞれ替手が加わるのが基本であるが、歌は基本的には三味線が担当するのが基本である。一方、

山田流においては、箏二面以上と三味線一挺を基本とし、箏のタテが主導権を持つ。歌は、浄瑠璃風で、奏者全員の歌い分けを原則とする。また、タテは興が乗ると自在に入れ手や洒落弾きをすることが許される。生田流においても、かつては、そういう習慣もあったようだが、昨今での公式演奏会では、まず見られなくなってしまった。

そのため、山田流で地歌の曲を演奏する場合は、当然、歌の節付も箏や三絃の手付も生田流の物とは細部で異なっている。また、三曲合奏に於ける尺八も、細かい装飾音の多い都山流よりは、殆どベタに付く琴古流の方が箏を生かす意味に於いて好まれる傾向が強い。

また、山田流の場合、各芸系入り交じった演奏の場も多く、個々の芸系の音楽的特徴としてはさほど顕著な差異はなく、他の系統の人との合奏においても、当意即妙に合わせ得るか否かは、個人の技倆に負う所が多いようである。

さらに、山田流での地歌撰取曲における歌詞の異同についても検証したが、助詞の相違や、類似の発音による名詞や形容詞の細かい相違は生田流同士でもあることで、これは口承伝承が主であった伝統芸能の伝承においては避け難い現象であると言える。ただし、例えば《新娘道成寺》は、曲題も山田流では《鐘ヶ岬》というが、歌詞においても、前者では「女子（おなご）は悪性もの、東育ちは蓮葉なものぢゃえ」と歌う「東育ち」を、関東中心の山田流では「都育ち」と、悪口の矛先を京都に向けている。また、遊里等の社交場で流行した地歌の性質上、歌詞内容に風紀上一考の余地のある用語を含む曲もあり、これらは、明治の「歌詞改良運動」一部改変されたものの、関西では、従前の歌詞が相変わらず歌われ続けたのに対し、山田流では、改編に従ったものが多いといえる。

以上、一応の結論を得てはいるものの、今後さらなる検証の続行が望まれる課題である。

5. 主な発表論文等

〔その他〕

(1) 萩岡松韻りさいたる

演奏：山田検校作曲古曲《めぐり逢うせ》、東京藝術大学奏楽堂（東京都台東区）、平成 26 年 11 月 11 日

(2) 萩岡松韻りさいたる（同上）

配布パンフレット製作

(3) ラジオ放送での演奏

・古曲《花妻》および古曲《夏やせ》、NHKFM 放送、平成 24 年 8 月 4 日

・古曲《明烏》、NHKFM 放送、平成 25 年 7 月 6 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

萩岡松韻（HAGIOKA SHOUIN）
東京藝術大学・音楽学部・教授
研究者番号：30376925

(2) 研究分担者

久保田敏子（KUBOTA SATOKO）
京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・名誉教授
研究者番号：10090200

(3) 研究分担者

野川 美穂子（NOGAWA MIHOKO）
東京藝術大学・音楽学部・講師
研究者番号：50218294

(4) 研究分担者

長谷川 慎（HASEGAWA MAKOTO）
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：00466971